「十戒と福音」（出エジプト二〇・一～一七、マタイ二二・三四～四〇）

1　十の戒め〔言葉〕

八月は例年、キリスト教学校の日として礼拝をしてきました。ただ今年は学生・生徒の皆さんを積極的にお誘いするのを控えています。学校の様子もお聞きし、残念ですが今年は今まで通りにはできないと判断して、この日を迎えたところです。

そこでこの八月、今年ここまで説教で取り組んできた創世記、アブラハムの信仰を辿る学びをしばらく中断し、キリスト教信仰の基本でありながら、それだけ単独に取り上げられることの少ない事項を、この機会を利用し、いろいろ学び直してみたいと考えています。

十戒、使徒信条、主の祈りの三つを取りあげる予定です。今日は十戒、来週は使徒信条、そして八月二三日は、主の祈りです。これらはまとめて「三要文」などと呼ばれることもありますが、三つとも直接・間接に聖書から出たものです。聖書をもとに信仰生活、教会生活を築いて行く上での指針です。十戒は聖書の神の御心を明らかにし、使徒信条は私どもの信仰の基本を、そして主の祈りは私どもの生活の指針を示しています。聖書は膨大であり、内容も多岐にわたります。聖書というジャングルで道に迷うことがないように、聖書をもとにこうしたものがつくられ、教会の長い歴史の中で定着したものです。

さて今日は十戒です。旧約聖書、出エジプト記二〇章にあります（申命記五章にもあります）。先ほど読みましたが、短縮した形で、口語訳を基本にもう一度読み上げておきます。

わたしは、主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。
あなたは、わたしのほかに、なにものをも神としてはならない（一）。
あなたは、自分のために刻んだ像をつくってはならない（二）。
あなたは、あなたの神の名を、みだりに唱えてはならない（三）。
あなたは、安息日をおぼえて、これを聖とせよ（四）。
あなたは、あなたの父と母をうやまえ（五）。
あなたは、殺してはならない（六）。
あなたは、姦淫してはならない（七）。
あなたは、盗んではならない（八）。
あなたは、隣人について、偽証してはならない（九）。
あなたは、隣人の家をむさぼってはならない（一〇）。

「あなたは、わたしのほかに、なにものをも神としてはならない」（三節）、これはふつう第一戒と呼ばれます（ただし「わたしは」ではじまる序文〔二節〕も含めて第一戒とする時もあります）。この第一戒からはじまる十の戒め、あるいは十の言葉が十戒と呼ばれるものです。

出エジプトの出来事は皆さんご存じのことと思います。イスラエルの民がエジプト

を脱出し、神の約束の地・カナン目指して旅立ったという出来事です。今日まで神の救いの原型と見なされている、イスラエルの歴史上最大の出来事です。紀元前一二八〇年頃とされています。

その時の指導者がモーセです。彼に率いられたイスラエルの民、実数は百万人、あるいはそれ以上いたと思いますが、エジプトの国を出て三月目に（一九・一）シナイの荒れ野に到着します。ようやく一息ついた、のでしょう。そのとき、その後与えられることになるあまたの律法の基本として、真っ先に、モーセを通して与えられたのがこの十戒なのです。

一年後シナイの荒れ野を出て（民数一〇・一一）なお四〇年もさまよい歩くことになることは、この時点でだれも予想していなかったかも知れませんが、昼も夜も旅路を導く神のその御心が、こうして具体的に示されたのです。この戒めによって民は神の恵みに生かされ、守られます、それと同時に、民は、その信仰を、とり分けその従順を問われることにもなったのです。

2　恵みへの応答

十戒は、とくに第五戒からあと、倫理的な、道徳的な教え・指示をふくみ、そのようなものとしても、一般には非常にすぐれた人生規範として受けとられているかも知れません。ユダヤ人の神信仰と共に、十戒に示された高い倫理的な教えは、周辺の諸民族にも影響を与えたようです。いまもその普遍的な価値は少しも下がっていないと思います。

しかし旧約聖書の中で、イスラエルの歴史を背景にして考えれば、別の観点からも見る必要があります。十戒を理解するために、さし当たって二つ、基本的なその特徴を申し上げておきます。

その一つは、十戒は、神、すなわち、主なる神とイスラエルとの契約関係の中で発せられた戒めだということです。

それはどういうことでしょうか。先々週、九九歳のアブラハムのことを私どもは聖書で学んだばかりです（創世記一七章）。そこで神はアブラハムに、あなたとあなたの子孫と契約を結び、これを永遠の契約とし、あなたとあなたの子孫の神となるとの託宣を与えたのでした（一七・七）。

このアブラハムの神が出エジプトの救いの神です。モーセを立て、民をエジプトから救い出した神は、まさにこの父祖アブラハムの神、すなわち、アブラハムの神、ヤコブの神、イサクの神であったのです（三・六）。アブラハムとモーセとの間には四〇〇年以上の時間的な隔たりがあります。しかし神にとって四〇〇年は、たぶん何でもない数字です。

父祖の神が民の声を聞き届け、救ってくださったのです（三・七以下）。かつてアブラハムと交わした契約を神は忘れなかった、それに忠実であった。わたしはあなたとあなたの子孫の神となると約束した神は、エジプトの奴隷としての苦しみの中にご自分の民を放置しておかなかったのです。契約に忠実・信実な神、すなわち、恵みの神、これが十戒の神です。

十戒をちゃんと理解するためには、十戒を語っている神がアブラハムの神、父祖の神であり、ご自分のなした契約に忠実であった、それゆえ民をエジプトから救ってく

ださった、このことを何よりはっきり知らなければならないのです。それゆえに「わたしは」ではじまった神の告知、わたしはだれかを明らかにした言葉に、もう一度注意しなければなりません。「わたしは、主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」（二節）。

かくてイエスラエルの民は、主なる神の恵みを知ったのです。味わったのです。その中にあなたたちは生かされている。もしそうであるなら、このわたしのほかになにものかが神であることはありえない。この神の恵みに本当に生かされているとき、どうしてその方以外のものを神とすることがあるでしょうか。「してはならない」ではなく、「そうするはずはない」のです。それが第一戒です。「あなたは、わたしのほかに、なにものをも神としてはならない」。

この第一戒と同じく、十戒はすべて神の恵みを受けたことの応答的な在り方を記したものです。なるほど「～してはならない」という言い方が目立ちます。しかしもとの文言はじつは禁止の言葉ではありません。そうすることはないであろう、という言葉です。神の恵みを経験した神の民がその恵みに応答します。応答する中で民は、神の民として、真実に形成されていくことになります。十戒はその道筋を語ったものでもあるのです。

そう考えれば、その事情は、私どもが新約聖書から聞くことと少しも違わないのです。キリストの福音にふさわしく生活せよ（フィリピ一・二七）、あるいは神に愛されている子供だから、神にならう者となれ（エフェソ五・一）という使徒パウロの勧めも、恵みへの応答以外のものを語っていないからです。「～ねばならない」「～してはならない」のではない。がんばって、律法を行う、成し遂げるというのではありません。神の力によって、神への信頼において、私どもは御心にかなう生活を営んでいくのです。

3　十戒と教会

さて十戒のもう一つの基本的な特徴を申し上げたいと思います。これも新約聖書における十戒の理解と関係があります。

その前に、シナイ山で、「神の指」で「二枚の石の板」の上に書かれた十戒をモーセが授かったという故事を思い起こしておきたいと思います（出エジ三一・一八、申命九・一〇～一）。

二枚の石の板ですから、半分ずつ、つまり五箇条ずつ分けて書いてあったと常識的には考えられます。ただ聖書には詳しくは書いてないので、はっきりしたことは申し上げられません。しかし少なくとも言えることは、十戒は、はじめから二つに分かつことのできるものと考えられていたということです。

簡単に、結論から言えば、二つとは、神に関わる部分と、人、隣人、もっと広く共同体に関わる部分の二つです。

第一戒から第四戒（安息日規定）までが第一の板、神に関わるものです。そして第五戒（父母を敬え）から第十戒まで（むさぼるな）が第二の板、人と人との関係に関わるものということができます。このことは、すでにイスラエルの中で広く理解されていただけでなく（申命記六・四他）、イエス・キリストによってもそのように受けとめられていて、十戒のエッセンスとして、私どもに伝えられてきたことです。イエ

スの言葉を聞きたいと思います。

イエスは言われた。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」。これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。「隣人を自分のように愛しなさい」。律法全体と預言者はこの二つの掟に基づいている（マタイ二二・三七～四〇）。

第一の石の板に書かれた第一の掟は、全身全霊をもって神を愛しなさい、です。第二の石の板に書かれた第二の掟は、全身全霊をもって、隣人を、自分のように愛しなさい、です。かくてイエスは、十戒の精神を神への愛と、人への愛として示したのです。この理解の仕方は、言うまでもなく、使徒パウロにも（ローマ一三・一〇）、あるいはヨハネにも（Ⅰヨハネ四章）受け継がれて、今日の私どものところまで届いています。

十戒の個々の戒めは、新約聖書の各所で真剣に受けとめられていることに今日は触れることはできません。少し注意して新約を読んでみると明らかです。むしろその多さに驚くほどです。

宗教改革者のルターも十戒をきわめて重要視した人の一人です。彼がドイツ国民のために、とりわけ子供に親が教えるために書いた『小教理問答書』（一五二九年）は十戒からはじめて、使徒信条、主の祈り、そして洗礼と聖餐に及び、私どもプロテスタント教会の信仰教育の流れをつくったものです。

今日は十戒を扱いながら個々の条項にまで立ち入ることはできませんでした。いつか機会があれば、関連する新約聖書を取りあげるさいにでも、詳しく申し上げてみたいと思っています。

しかしその上で最後に一つ、十戒を取り上げた以上、どうしても申し上げておかなければならないのは、十の戒めうち、やはり第一戒が、これがやはりもっとも重要だということです。私どもの教会も、私ども自身も、つねにそのことを問われているのです。必要ならそのことをはっきり告白しなければならないのです。戦後七五年、なるほど平和は与えられた。しかし戦時中の日本の教会はどうだったのでしょうか。国策に協力しつつ、ついには真の神ならざるものを、神のごとき地位に置くことに甘んじなかったのでしょうか。それは、この第一戒から、正統に問われてくる神の問いにほかなりません。

最後に思い起こすのは、ボンヘッファーが、戦争が始まって二年後（一九四一年四月以降年末までの間）に書き記した「罪責告白」という文書です（『現代キリスト教倫理』所収）。詳しくは今日は申し上げられませんが、十戒に基づいて、当時のドイツの教会の罪責を告白しています。とくに教会がユダヤ人の苦しみにきちんと向き合っていない現状を罪責として告白しています。つまり十戒は神の恵みに応答して歩む私どもの指針であると共に、私どもの在り方がそれによって照らし出される、いわば鏡のような神の言葉でもあるのです。十戒は私どもに、御心に本当に従っているか、心から従っているか、鋭く問いかけます。私どもの罪が明らかにされます。しかしそれは救いの道です。なぜなら罪を告白した私どもに、ただイエス・キリストの赦しの恵みによりすがって歩む道を、同時にそれは指し示してくれるからです。そのようにして私どもを生かす神の言葉、それが十戒です。

（二〇二〇・八・九）